



伊達市大滝区におけるヒグマの実態と行政との連携について

自然保護監視員・鳥獣保護員 橋本強志氏

私は昭和24年1月26日、羊蹄山の東に位置する京極町川西で生まれました。先祖は九州、熊本県の出身で、明治20年に新琴似に屯田兵として入植し、私は北海道で橋本家五代目となります。

私が現在の大滝区（旧大滝村）に来たのが昭和26年4月、2才3ヶ月の時であります。私の父、そして私の祖父も狩猟を行っており、私は幼少の頃から夏は畑仕事、冬は山仕事と狩猟を行う父の元で育てられてきました。私が銃の必要性を感じ始めたのは小学2年生位の頃からだと思います。

当時、大滝の農家では各家々で数頭の綿羊を飼っていました。寒い北海道で足の先から頭まで暖かい毛糸で身を守るためにです。ところが、この羊が大滝からいなくなってしまいました。毎年のようにヒグマに襲われてしましました。ある家では畠で、またある家では羊小屋から半死の羊が喘ぎ苦しみながら食われ去られる。私の家の羊2頭も一晩で襲われてしまいました。この頃から熊に対して銃を持つと決めていたように思います。その後も、熊による家畜被害が無くなることはありませんでした。ある年は牛が、ある年は馬がと続いたのです。

その頃大滝の円山地区では栗林闘太郎氏、本郷地区では佐々木文雄氏、橋本庄八（私の父）と熊撃ち名手がいましたが、撃ち取れば次の熊がまた現れるという繰り返しでした。また、被害も畠ではとうきび、燕麦、蕎麦、家畜では主に牛が大きな被害を受けていました。

中でも昭和44年9月清陵地区で酪農を営む板狩弘治氏の牛が殺され続け、同地の竹原芳久氏の牛舎兼自宅に熊が夜間入り、繫がれている牛を次々と殺傷し5頭の成牛が被害を受け、酪農で生計を立てていた竹原さんは熊の仕業になすすべもなく、この世の地獄を見ているようであったと大きく肩を落とす姿が今でも思い出されます。また、この熊は次年の4月、私の父が豊平川源流部で倒し、この熊による牛への被害はなくなりましたが、後も愛知地区で自宅すぐ横に繫がっていた山羊が殺され、また最近では、清陵地区的牧場で保管されているラッピングされた大きな牧草ロールが50巻程、熊に食いやぶられる被害が続きました。

熊の数々の仕業を目の当たりにした私は、父と同じく熊撃ちの道を進み始めました。

私は中学の頃から父について熊撃ちの方法や熊の行動等数え切れないくらい色々なことを学びました。そのことは今も私の中に多く残されています。春熊駆除



写真1 ヒグマにやぶられた牧草ロール

の山の中での2~3泊野宿。また、夜の山歩き、深い霧の中を地形図と方位磁石を使い歩き、まだ車等があまりない時代でしたので、早朝5時頃家を出て、帰りは夜の8時~9時頃になることもあります、1日で、30Km~40Km位の山歩きです。

エゾヒグマは非常に知能に優れ恐ろしい力とスピードを持ち備えた動物です。また、食性も羊を食べる時は次々に羊を襲い、牛を食べる時は次々に牛を襲う。草木についても山ウドを食べる時はウドばかり、フキを食べる時は続けてフキを食べ、また秋には山ブドウ、コクワ、ドングリ、オニグルミを食べる時も同じような食べ方をします。また、4月頃の残雪時には、雪の少ない川の中を歩き、危険を察知すると2~3mもある残雪の壁を垂直に飛び上がります。また、残雪時急斜面に起る全層雪崩の地響きに驚き走り去ることもあり、その場に戻り事の様子を確かめることもあります。春穴から出て大きく移動する際に目的地近くにある山頂に登り、頂でぐるぐる廻り自分が来た方角を確かめるかのような行動もとります。おそらく冬にまた穴に戻る際のためと考えていますが、どのようにして記憶しているのか私にはわかりません。また、熊はあまり目は良くないと云われていますが、このような遠くを眺める行動、また、動く物に対する反応、秋の山々の色付きに対する熊の同化行動等を考えると、私たちに見る事が出来ない部分の何かが見えているのではないかと思わされることもあります。それと併せて、熊が長い時間同じ場所に留まり、食べる、眠る際にとる行動に、その場所全体を数百メートルに渡り熊が地形を利用して巧妙に足跡を付けるのです。この行動を逆に考えると、熊は最初に自分の居場所を決め、次に

周囲の地形を見て、自分の足跡を残し、最後に行き戻しをして目的の場所に入るといった行動をとるのです。私はこの行動を熊の止め足と認識しています。父と共に、また、私自身でも数十頭の熊を倒してきましたが、倒すべくして倒したのではなく、たまたま山の神が私に熊を与えてくれた時のみ倒すことが出来たのだと思っております。

大滝地区でのヒグマの実態についてですが、春4月～冬12月末位迄の間に20頭位のヒグマが出入りをしています。ここ数十年、春熊駆除が行われずにきたことが、ヒグマが急増した要因と考えています。近年では大滝地区の方にも農作業での不安、身近にある里山の山菜も採りに行くことが出来ずいるような状態です。ヒグマの数が増えたのに合わせ、里へ里へと人の生活の場に近づき過ぎているのです。



写真2 ヒグマの糞

平成25年12月迄に私なりに地域、足跡の大小等から調べたものを数にすると、成獣では雄が約6頭、雌が約3頭、また幼・若獣では雄が7頭、雌が約4頭となります。

この数を合わせますと大滝全域で約20頭のヒグマが出入りをしていると考えられます。

年間5頭～6頭の個体数調整を行い、5～6年後に5～6頭の数にすべきと考えますが、将来的には現状の共存ではなく、住み分けが必要不可欠と考えます。人々が生活する所。野生鳥獣の安住の場との線引きをする必要があると私は考えます。

大滝地区におけるヒグマの情報の住民への周知はヒグマを発見した方が駐在所、警察署、地元獣友会等に連絡をする場合や地区の方が大滝部会員に直接連絡をする場合、また、私たち部会員がヒグマを発見する場合等がありますが、いずれも伊達市また、大滝総合支所に連絡・報告をします。また、私たち部会員が伊達市、大滝総合支所から連絡を受けた場合は、ヒグマの状況等私たち部会員と市環境衛生課とで協議し、必要に



写真3 ヒグマによってなぎ倒されたフキ

応じて現地に注意看板を立てたり、大滝ケーブルテレビで放送してもらいます。また、警察、消防等の連絡は、市環境衛生課の方で行っております。また、出没が住宅地近くの場合は大滝総合支所職員、駐在所の所長が各家に注意を呼びかけて廻ります。急の場合は私たち部会員が直接家を廻る場合もあり、さらにヒグマ出没期には逐次、私たちの方からケーブルテレビ局の方へヒグマ情報を伝えており、テレビ局から地区の方々へ情報が流れております。また、地区の方々からも、ヒグマの状況を教えて欲しいとの連絡を受け対応しております。自治体に求めることは、大滝区全域でのヒグマの必要頭数と現状の生息頭数を把握して、個体数調整を行うのが重要と考えております。そのためにも、地域で出来るだけ正確なヒグマの生息状況を調査し生息数報告を行うことの出来る人材が必要であり、また、この調査には非常に危険を伴うことから人材も限定されるのではと考えます。

このようなことから、私たち部会員もヒグマの情報を共有し、市役所へ必要に応じて情報の提供を行っております。また、色々なヒグマに対する情報の中にはヒグマが人に対して被害を及ぼす割合は1/1000とか1/2000とか数字で表されているのを目にしていますが、私はこのようなことを数字で表すことが出来るものかと複雑な気持ちで見ております。

なぜなら、私も自分なりにヒグマをこの地域で調べてきましたが、一番危険なヒグマは人を食う(襲う)ことを目的としているヒグマがいることです。そして同じように危険なのがヒグマが必要最大としているヒグマの進路を人間が塞いでしまうことだと思っております。

このような人間の行為がなされると人的被害は1/1000～1/2000という数字が大きく変わることになるでしょう。人間が全く気づかない状態でヒグマの危険行動の中に入り込んでしまうことこそが一番危険なのだと考えます。今迄この地域では人的被害は発生していませんが、これからも行政と部会員が情報を共有して地域の安全と安心が図られるように努力していくことが大切であると考えます。